

「信仰：神と人の架け橋」

14 わたしには、ギリシヤ人にも未開の人にも、賢い者にも無知な者にも、果たすべき責任がある。15 そこで、わたしとしての切なる願いは、ローマにいるあなたがたにも、福音を宣べ伝えることなのである。16 わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。17 神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは「信仰による義人は生きる」と書いてあるとおりである（ローマ1章14節—17節）。

もし私たちがお金を払うことによってクリスチャンになることができるならそれはたやすいことです。もし、私たちが聖地イスラエルに巡礼の旅に行ってくればクリスチャンになれるのなら、それもたやすいことです。もし、私たちが三日間、断食して祈り続けるならば、クリスチャンになれるのならそれもできないことはありません。

私達と神様とを結ぶ架け橋は一つしかない。それは「信仰」という架け橋だ。

この国でビリーグラハムを知らない人はあまりいません。この国で彼は最も尊敬されている説教者です。彼は世界で最もよく知られた伝道者です。

かつてビリーグラハムがまだ若かりし時、彼と共に伝道をしていたチャールズ・テンプルトンという人がいました。彼はビリーグラハムの右腕として同じような偉大な説教者になると期待されていました。しかし、彼はある時、自分の信仰に疑問を抱き、その信仰を捨てました。彼は不可知論者となり、その生涯を生きました。不可知論者とは人間に神などを知ることはできないのだという考えを持つ人のことです。

かつてテンプルトンもビリーグラハムと同じところに立っていましたが、彼はその袂を分かち、彼は別の人生を歩み始めました。

テンプルトンが信仰を失うきっかけとなったのは「ライフ」という雑誌の表紙を飾った写真でした。それは当時、早魃に襲われていたアフリカ

大陸に暮らす一人の女性が亡くなった赤ん坊を抱いて、空を見上げているという写真でした。その写真を見て彼は思いました「この女性に必要なのは雨だけだ。雨さえ降っていれば！愛に満ちた、慈悲深い創造主がいるのに、彼女が望んだ雨が一滴も与えられないなんてことがありうるのか」。

パウロは今日開かれている聖書の箇所において、とても大切なことを書いています。すなわち16節以降に「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。神彼はの義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは「信仰による義人は生きる」と書いてあるとおりである」。

この言葉が私達に言わんとすることは、私達の救いは私達の信仰にかかっているということです。先に話したように私たちがどこかに巡礼したとか、苦行を積んだとか、お金を払ったというようなこととは何の関わりもないのです。ただ私達が信じる時に私達には救いが与えられるというのです。

私達が日々、向き合う厳しい現実に対する答えを私たちは持っていません。この現実に対する神の思いというものを知り、それを理解して全てを説明できる人はいません。誰一人としていません。

箴言3章5, 6節には「心をつくして主に信頼せよ。自分の知識に頼ってはならない。すべての道で主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる」という御言葉があります。もし、私たちの知恵とか理解が十分に信頼に値するものであるならば、私達はそれに寄り頼めばいいのです。しかし、現実はそうではありません。聖書はそれらに頼んではいけないというのです。もちろん、これは自分の経験や知恵で決断をするなというようなことではなくて、それらだけを寄りどころにしてはならない。そうではなく神に信頼せよというのです。

今までそうであったように、これからも聖書の内容が編集されることはなく、それが300年後であっても神が我々との間に架けている橋は信仰なのだということをこの言葉は私達に語りかけています。

そう信じるということは公平です。誰でもできます。今、私達は信じることができます。誰にでもできることです。そこには国籍、性別、年齢

の区別はありません。しかし、信じるということほど難しいこともないので。

クリスチャン精神科医の工藤信夫先生はその著書の中で興味深いことを書いています。すなわち、先生は「健全な不信仰というものがあることを私達は知っていていいのではないだろうか」というのです。工藤先生はその著書の中でこう書いているのです「実際、ここに至ってもう語ってもよいと思うので、あえて申し上げるのであるが、私の信仰生活の20年間を支えたものは、あのよく引用される聖書のみことば「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい」（ピリピ4：4）などという類のものとは程遠いものであった。

そして、工藤先生は言います「いつも迷っていたし、悩んでいた。そして、その時に私の心にあったのは、はたして神は本当に全ての事態に関与しておられるのだろうか」という問いであった。しかし、今言えることは、こうした神に対する素朴な疑問と探究心こそが、私を神に向かわし、その関係を強固なものとしたということである。いわば、つぶやきや不平が私の信仰を豊かにしたのである（「信仰による人間疎外」いのちのことば社 工藤信夫）。

パウロは言いました「私たちは信仰に始まり信仰に至る」と。私達は二つの物の間を生きているのです。かつてユダヤ民族が過酷な奴隷の身としてエジプトにおりましたが、神は彼らをそこから救い出し、約束の地、カナンへと導かれました。しかし、その道中、彼らは荒野をさまよい、その期間、彼らの不信仰は顕著なものとなったと聖書は記録しています。そう、彼らは信仰と不信仰を行き来しながら旅を続けました。私達も今、このエジプトとカナンの間を生きているのです。

ローマ4：18において、彼は信仰の祖と言われているアブラハムについてこう書いています「彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた。そのために、「あなたの子孫はこうなるであろう」と言われているとおり、多くの国民の父となったのである」

アブラハムは望み得ないのに、なおも望みつつ信じたのです。到底、信じ得ない、しかし、信じた。私たちは本来、信じることもできない者なのだ。信じたいけれど、信じられない。でも、信じる。私達はこの「信じる」「信じられない」という間を行ったりきたりして生きているので

す。そして、この二つの間を行き来することにより、私達はその人生の旅の中で、信仰が持つ力というものを一つ一つ確認していくのです。
「信じることができない」という思いからも、信仰の成長はなされていくのです。

先にお話しましたテンブル氏にこんな質問がなされました。「テンブルトンさん、あなたはイエス・キリストについて、どんな評価をお持ちですか」。彼の表情はその時、穏やかになり、こう話し始めました「イエスは歴史上最も素晴らしい人間です。道德観は天才の域に達していたし、独特の倫理観も持っていた。私がこれまで直接会ったり、本で読んだりした人物の中で、本質的に一番頭のいい人だと思う。イエスについて言えることは、とにかくすごい人物だったということだ」

「お話を伺っていると、イエスのことを心から大切に思っていらっしゃるように聞こえますが」。テンブルトンは答えました「確かに…イエスは、私の人生の中で一番大切な人なんだ・・・」適切な言葉が見つからないのか、言葉につまる。「妙に思われるかもしれないが・・・イエスに対しては敬愛の念を抱いていると言わざるをえない・・・私は自分の行動を考える時、常にイエスをお手本にした。イエスだったらどうするだろう」と。

突然、テンブルトンの思考が止まったのが分かりました。この先話を続けるべきかどうか悩んでいるような、短い間。そしてゆっくりと「あの・・・イエスは一番・・・」と言って黙り、それから「私にとって、イエスはこの世界の中で一番大切な存在なんだ」と宣言した。

そして、誰も想像できなかった言葉が彼の口からこぼれたのです。「もし、こういう言い方ができればだが・・・」テンブルトンの声が震える。「私は・・・、イエスのことが・・・恋しい」。テンブルトンの目から涙が流れた。顔をそむけ、下を向き、左手を顔の前にかざして泣き顔を見られないようにしていた。肩が震えている・・・。

テンブルトンは「ライフ」の写真によってその信仰を失いました。そう、アフリカを襲った旱魃により、亡くなった赤ん坊を抱く女性の写真です。そのような過酷な現実を前に彼は創造主の存在を信じられなくなったのです。

ここで、皆さんの中に先に触れましたライフ誌の写真に対する回答を、いつ牧師がするのかと考えている人がいるのかもしれませんが。残念なことに私にも分かりません。

でも一つ分かることがあります。それは聖書が約束しているように、これらの世界の不条理にも目が開かれる日がくるということです。そして私はそれを信じているということです。

この度、訪日して母と会って来ました。ご存知のように当初、彼女はこちらに移り住んで私達と共に暮らす予定でした。しかし、それは身体上の理由により不可能となりました。彼女がどんなにそのことを願っていたかということを私達は知っています。しかし、その思いは叶いませんでした。しかし、それでも私達は神は愛なるお方だと信じます。神が大いなるお方であるのなら、その大いなるお方の御心をちっぽけな自分の予定やウィッシング・リストの中に詰め込もうとしてはなりません。

彼女は常々、ローマ8章28節の言葉、すなわち『神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている』という言葉をもとに自分の人生になぞらえてきました。彼女が元気な時、「万事を益とする」ということは、この地に移り住むということであったかと思えます。しかし、神様のご計画はそれとは違ったようです。それではこの神の言葉は成就していないのか。いいえ、それはそのまま今も成就の過程にあると信じます。確かに私達にはその全体を知りうることはできません。しかし、私達にはそのことを信じる信仰があるのです。

神様は私達の願いを叶えることを第一優先事項としているお方ではありません（主にある兄弟姉妹、このことを理解しないと私達は神を私達の目的のために用いる道具とします。それは大いなる誤りです）。神様は私達の願いをことごとく叶えることよりも、弱い信仰者である私達をさらに神に対する信頼へと導かれることを最も大切にしておられるお方なのです。

コリント人への第一の手紙13章12節「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて見るであろう。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。しかし、その時には、わたしが完全に知られているように、完全に知る

であろう」という言葉が必ず成就する日がくるということ。そのことを私達は信じているのです。

心をつくして主に信頼せよ。自分の知識に頼ってはならない。すべての道で主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

私達の今年度の標語は「見えるところによらず、信仰によって歩む」です。見えるところだけが私達の拠り所であるのなら、私達の心に平安はやってきませんでしょう。平安は常に信頼と共にあるのです。だからイエス様はあの言葉を弟子達に残されたのです。

『わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな』（ヨハネ14章27節）。

実に主はご自身と私達の間をつなぐ橋として神への信頼をそこに置かれたのです。

『世に勝つ者はだれか。イエスを神の子と信じる者ではないか』（1ヨハネ5章5節）

お祈りしましょう。